

『暗闇』

階段を登りきり、二階の暗闇の中へリユイーズは入り込んだ。彼女には闇を見通す力がない。明りのない場所へ自ら進むなど自殺行為だ。

だが、だからこそ彼女は一人でやってきたのだ。

建物は自警団に包囲されている。おつて衛兵隊も包囲の輪に加わるだろう。石材ギルドの地図を信じる限り逃げ道はない。鼻につく血の臭いからしてクレドネエは盗賊ギルドの者達を片付けたのだろう。

ここから逃げ出すには魔法の力を使うか、大立ち回りを演じて力づくで突破するかしかない。大立ち回りなど暗殺者に似つかわしい末路ではない。

クレドネエは魔法の力で脱出するか、この建物に恐怖や混乱を撒き散らして、その隙に逃げ出す事を考えているのだろう。それでは困るのだ。

できれば自分の手でクレドネエを捕まえない。それが不可能ならば騎士団が駆けつけてくるまで彼を釘付けにしなければならない。あえて危険を冒して敵地に踏み込むのは、時間稼ぎの意味もあった。

身構えながら、周囲を窺いながらゆつくりと進む。闇の中に気配は感じられない。血の臭いがますます強くなるばかりだ。

『天使王国』繁栄期の建築様式は、外側に閉じ中庭から光を取り入れるつくりになっている。盗賊ギルドの連中は闇の中も見通せたのか、中庭に向いている窓も開けずに仕掛けたようだ。

クレドネエ襲撃を他の者に気取られない様にする為だろうか？

彼らのような配慮がいらぬリユイーズは先ほど見た構造図を思い出し、窓の方へと進んだ。相変わらず気配は何もない。背中を壁に向け、ゆつくりと音もなく木製の開き窓を開けた。

黄昏の光が差し込んでくる。同時に林檎の白い花びらが舞い込む。床には三つの死体が転がっているのが見えた。どれもこれも血の海に沈んでいる。クレドネエに返り討ちにされたようだ。

床が血だらけであるにも関わらず足跡一つ残されていない。それでもリユイーズは、ここにクレドネエの気配を感じていた。この、生臭い鉄錆めいた臭いが充満する黄昏の部屋に、間違いなく目指す相手がいる。

身構えたままリユイーズは呼びかけた。

「隠れていないで、出てきたらどう？」

返事は期待していなかった。だから嘲るような声が聞こえてきて内心驚く。

「悪いがごめん被る。俺ははずかしがり屋なんだ」

「はずかしいと言いつつ三人も殺しているわね。いや、もっとかな？」

話を続けて声の位置から相手の居場所を探ろうとする。だがそれは容易な事ではなかった。

「殺しは得手じゃないんだ。こうやって隠れている方が得意でね」

「ご謙遜を。私が知っている限り貴方は、六人は確実に殺している」

「へえ？ 姐さん、俺が誰だか知っているのかい」

「大貴族三人を暗殺して中原を混乱の渦に叩き込んだ張本人、クレドネエでしょ」

「名前はあたりだ。だが俺如きが人を殺したところで、そんな大事にはならんと思うがね」

何度も言葉のやりとりをして気付く。相手は喋った後に移動している。微妙に声の大きさも変えている。これは一筋縄ではいかない。

「知らぬは本人ばかりなり、ってこと？ でも事実戦争は起きようとしているわ。

一体何を企んで暗殺を繰り返したのか。依頼主は誰なのか。どうしても教えて欲しいわね」

「知ってどうする？」

「私に捕まったら、教えてあげるわ」

「捕まえられるかな？」

「試してみなければ解らない」

「ふむ・・・逃げられそうもないか。袋の鼠だな」

「窓の外を見たの？ そうよ。あれだけの人数を相手にするのは、いかに貴方でも大変でしょ？ 大人しく捕まった方が身のためよ」

「それこそ試してみなければ解らないぜ」

ここでリュイーズは怪訝そうに片眉をあげた。

「私を逆に捕まえて、人質にでもするつもり？」

「そういう手もあるな」

彼女の瞳がすつと細められた。

「それこそ、試してみればいいわ」

「笑っているな」

「そう思う？」

「余裕たっぷりって感じだ。そういう相手には突っかかりたくなる」

「やってごらんなさい。私はその為に来たのだから」

リュイーズは隠れているクレドネエを見つけ出す事を諦めた。逆に相手から出てきてもらえれば楽だと挑発を仕掛ける。しかし初手のクレドネエの不意打ちをかわせるかどうかは賭けだった。

それでもリュイーズは自らの手で彼を捕らえる為に、あえて危険な手段をとる事にした。

言葉が止まった。一呼吸おいて来ると感じた瞬間、背後に気配を覚える。後は鍛え上げた体が勝手に反応した。紙一重でクレドネエの刃をかわす。カウンターでリュイーズは拳を彼の腹部に叩き込んでいた。

うめいたクレドネエはすぐさま影に飛び込む。跡を追っても彼の姿はない。だが部屋の何処かで嘔吐する音が聞こえる。鼻につく異臭で場所が解る。だがそこに駆けつけても吐瀉物が床を汚しているだけだった。

「やってくれたな」

リュイーズはもはやクレドネエの言葉に返事もしない。嘔吐した彼には異臭がついている。その臭いを追っていけば彼の居場所は解る。勝負はついた。決着をつける為に彼女は急いだ。あとはクレドネエを捕らえるだけ。それだけだ！

だが、臭いがする方向、彼がいる筈の場所にも誰もいない。汚物で汚れた上着が脱ぎ捨てられているだけだ。しまった。

後悔した瞬間に冷たい殺意を感じた。体が反応する。だが遅い。

冷たく熱い殺意の塊が、容赦なく自分の心臓を貫いた事をリュイーズは悟った。彼女の胸をまさぐりながら耳元で異臭漂うクレドネエの囁く声が聞こえる。

「案外若くていい女だったな。惜しいねえ。だが俺もまだ捕まりたくないんでね」

殺意の塊が引き抜かれ、勢いよく自分の熱い血潮が吹き出ていくのをリュイーズは感じた。遠ざかっていくクレドネエの気配。冷たくなっていく自分の体。

ごめんね、ポリー……

その言葉が一瞬彼女の脳裏に過ぎって、そして彼女の瞳は永遠にその光を失った。

ほとんど同時に重々しくも荒々しい階段を駆け上がる音が響いた。

黄昏の光に満ちた殺戮の場所に、光に包まれ、鎧を身にまとった天使が現れた。

今さっき崩れ落ちたばかりの、リュイーズの遺体の前に立ち、ポルメリアは言葉を失って呆然と立ち尽くした。

夕闇の風が吹く。白い林檎の花びらが一片、リュイーズの黒髪に舞い落ちた。

夢の中にいるようなものだ。クレドネエはそう思っていた。

ポルメリアが生き延びていた事を知り、恐れおののいていた頃からすれば、今は全てが曖昧な感じではやけているような気がする。

三人の大諸侯を殺したという事すらも遠い昔のように感じていた。

昔からクレドネエは危ない事が嫌いだった。

危険な事からはいつも遠ざかり、いつでも逃げられる立ち位置を好み、利益を掠め取り、損をする前にずらかる。

そうやって生きてきた。だから、警戒厳重な大貴族の城や屋敷に忍び込み、

盗みもせずに彼らをただ殺してくるなどという危険な事を自分がやっているなんて、信じられる事ではなく不可思議な、まったく夢の中の出来事だとしか理解できなかった。

全てはあの『ワーム』と名乗る赤毛の少年と関わってからだだった。

彼の話を聞いていると、自分の気持ちが大きくなり、どんどん大胆に何でもできる気になっていく。

実際今までやすやすと全てをこなしてきた。『ワーム』の言うままに実行する事に疑問すら思い浮かばずに。アンゲルウルプへ向かうように囁かれたのが何時だったのか、覚えていない。その資料を、宛がわれた自分の部屋に処分もせずに残して行くなんて、まったくもって自分らしくない事にも関わらず平然とやっている。

その挙句がこの様だ。

一体何の為に、この廃墟のようなちんけな街にやってきたのか、忘れてしまった。ただ、ここに潜伏するようにと『ワーム』から言われたのだ。

その為に逃げ道のない建物で包囲されてしまった。

まったく間抜けな話だ。以前なら二つ以上の抜け道を確保しないと安心していられなかったというのに、今はそんな事を考える必要すら思いつかない。

最初にやってきたのは同業者三人だった。足音をさせなくても匂いで解った。

手口は解っている。相手がこちらを見つけていない事も。ならば話は簡単だった。

面子にこだわって命を落とす愚か者が三人、という事だ。

次にやってきたのは同業者のようで同業者ではない若い女だった。手だれだ。駆け引きもできる。

迂闊に仕掛けていい一撃を食らってしまった。

以前ならそれで逃げを打っていた筈だが、包囲された建物の中で逃げ道は何処にもない。

三階には『ワーム』が連絡用に残した魔法陣が残っている。

彼は時々それを使って現れる。もしかしたらそれで逃げる事ができるかも知れない。

だがクレドネエは、そんな事すら思いつかなかった。上着を脱ぎ、口の周りの汚物を拭い、それを捨てて隠れる。こんな手で引つかかるかどうか、賭けであったが勝ちを急いだ女は大して警戒もせず畏に引つ掛かった。

勝負は一瞬で決まる。

意外に若くて美人だった。一撃で殺してしまったのは惜しい事だったが、派手な足音を立ててまったく別の新手が現れたから、その場を離れなければならなかった。

黄昏の中に光がさした。

新手はポルメリアだった。

クレドネエはこの事態を酷く恐れていた筈だ。たった一人で城砦を陥落させる少女騎士相手に自分如きかなうはずはないと。

ところが今、この時になって彼は自分が酷く興奮している事を知った。

ついさっき殺したのが若く美しい女だったせいかも知れない。

凛と美しく、可憐なポルメリア。彼女を蹂躪してから殺す。

その思いつきが、かつて覚えた事のない興奮をクレドネエに与えていた。

「『天使の眷属』を殺す、か。やってやろうじゃないか」

彼の頭からは、ポルメリアが一体何者であるかという事は消えていた。

ただただ、この世でも珍しい『天使の眷属』である事。それを殺す機会が自分に巡ってきた事に喜びを感じていた。

自分がかつてとは違う、別の存在になっている。

その事に、クレドネエは気付いていない。

ポルメリアが目的の建物を見つけるのにさしたる時間はかからなかった。

人も疎らな廢墟の群れの中で、その一角だけに何十人もの人々がたむろしていたからだ。

近づく前に手早く鎧をまとい、浮遊盾を浮かせる。その上で堂々と目的の建物に入っていく。当然見咎められて止められるが、

「リュイーズ・ポントワ殿に助太刀いたす」

と大声で威嚇すると誰も強いて制止する者はいなかった。

白骨を思わせる、装飾を剥ぎ取られた建物の中を通り過ぎる。中庭の林檎の木も目に入らない。

二階への階段には朴訥そうな青年が立っていたが、騎士のようにでたちのポルメリアが堂々と進んできたら何も言わなかった。

二階は異臭で満ちていた。血の臭い、吐瀉物の臭い、そして再び血の臭いが溢れる。

何かが崩れ落ちる音がある。嫌な予感がする。駆けつけたポルメリアが見たのは、今まさに事切れたリュイーズの姿だった。

息を飲み呆然とするポルメリア。

だが敵の気配を感じ取り、戦いがまだ終わっていないのだと悟ると涙を忘れた。

彼女は『善なる軍神』の使徒。戦いある限り、戦い続ける戦士だ。リュイーズの亡骸を弔う前に、やるべき事は敵の殲滅だった。

窓から入る光は、黄昏のものから夕闇になる。やがて闇に没するだろう。

しかし暗闇を見通す力を持つポルメリアには不都合はなかった。

彼女が発する淡い光は昼間、太陽の光の下では目立たない。だが闇の中では、いい標的になってしまう。

彼女はその事を理解しながら無造作に進んだ。魔法のものとはいえ重装鎧を着た彼女に隠密行動は無理だ。

忍び寄る敵を見つけ叩き伏せる以外に取るべき戦術もない。

「余裕だな、『城砦落とし』」

聞き覚えのある声が三階への上がり階段近くから聞こえた。

「・・・クレドネエか。この惨劇はお前がもたらしたものなのか？」

「その気になれば俺だって、お前さん並に死体の山を築く事はできるんだぜ」

冷たく嘲りを含んだクレドネエの言葉。

恐らくそうだろうとは思っていた。そうあって欲しくなかった。

だが、今、彼の言葉は、はっきりとポルメリアの期待を裏切り、自らの戦果を誇っていた。

「・・・ならば私は、お前と戦わなければならない。お前は我が友の仇なのだから」

それはかつての戦友と戦うという沈痛なポルメリアの決意だった。だがそれをクレドネエは笑った。

「善なる軍神の『戦闘人形』であるお前さんが友達だつて？戦う事しか能がないお前が。笑っちゃまうな」

ポルメリアは耳を疑った。確かにクレドネエとそれほど親しく言葉を交わした訳ではない。

だが彼女の知っている彼は少なくとも、こんな侮蔑に満ちた悪意を彼女に投げつけるような人間ではなかった。

「お前、本当にクレドネエなのか？」

「俺は俺だ。それ以外の何者でもない。」

お前が『城砦落とし』で『天使の眷属』で『戦闘人形』であるのと同じぐらい確かな事だ。

こいよ。遊んでやる。ご自慢の戦闘力を発揮する前に、俺が、お前を、殺してやるよ。その可愛い姐ちゃんみたいにな」

軽い身のこなしでクレドネエは上がり階段に姿を現した。

これ見よがしに姿を現し、わざとらしく足音を響かせて三階へ登っていく。

奥歯を噛み締めて睨みつけるポルメリアの藍色の瞳を見ながら、おどけて怯えたふりをしながら。

クレドネエが行ってしまった後、ポルメリアは再び足元に崩れているリュイーズの亡骸に目を落とした。

二度と再び生気に満ちた光が宿る事のない瞳。二度と笑う事のない唇。それらが虚ろに開かれている。

ポルメリアはリュイーズの瞳を閉じ、顔立ちを整え、飛び散った血飛沫を拭ってやった。

それだけでリュイーズは眠っているように見えた。

黒い豊かな髪の上に一片舞い落ちた、白い林檎の可憐な花びらが、場違いな長閑さを感じさせる。

「ごめんね、リュウ。一人にするけど、すぐ戻ってくるから」

答える事のない亡骸にそう呟くと、彼女の顔から悲しみも優しさも消えた。

三階への階段を上がるのはクレドネエの言葉通り、善なる軍神の『戦闘人形』である彼女でしかなかった。

窓が締め切つてある三階は暗闇の中に沈んでいた。しかし魔法による真なる闇ではない。

彼女の藍色の瞳は光がなくても、限られた範囲であっても、そこに何があるのか見る事ができる。それで不利になる事はない。

だが三階へ上がった彼女の視界にクレドネエの姿はなかった。

物陰に潜んで彼女に致命的な一撃を与える為に息を殺しているのだろう。

考えてみればクレドネエにはそれしか術がなかった。

正面からの打ち合いならば、正規の騎士として訓練され、

力づくで幾つもの城砦や塔を陥落させてきたポルメリアにかなう筈がない。恐らくリュイーズも同じ手口で殺したのだろう。

ポルメリアは階段を登りきったところで足を止めた。どうやって彼と戦うのか、それを考えなければならなかった。

本気で隠れているクレドネエを自分が探し出せるとは、彼女は考えていなかった。

重装鎧と浮遊盾に守られた彼女は、防御に自信がある。最初の一撃を受けて、返す剣でクレドネエを打ち据え気絶させる。それしかないと思う。

かつての旅の仲間である事も理由になるが、殺されたリュイーズの無念を晴らすためにも、やはりクレドネエは生きて捕らえなければならない。

リュイーズの望みは生きてクレドネエを捕らえ、彼の口から暗殺事件の黒幕を聞き出し、

中原諸侯にとって本当の敵は誰なのかを調べる事であった。

そしてそれは、首謀者をフォリヴァス宰相大公と疑う諸侯を鎮め、中原の戦乱を防ぐ意味がある。

戦乱になれば今よりも多くの民が戦火に泣き、難民が生まれる。それだけは避けなければならなかった。

戦い方が決まればポルメリアに迷いはない。部屋の中央に進み、背中をさらす。背後を守る浮遊盾と構えた剣に揺るぎはない。

それを嘲るようにクレドネエの声が闇から聞こえた。

「大胆だな『城砦落とし』。いや、さっきの女も同じ事をやったな。

よっぽど自信があるんだろうが・・・だが、その自信が命取りだぜ。結果がどうなったか、お前だって見ただろう？」

周囲を探るように見渡すポルメリアは返事をしない。声の方向からクレドネエの位置を見つけようとしているのだ。

「はっ。真面目だねえ。それとも返事をする余裕もないくらいにビビっているのかな？」

彼の声に構わず周囲を見渡す彼女だが、視界の端に何かを見つけた。

遠目で見つけたため良く解らないが、床に正円の何かが書き付けられている。魔法陣だろうか？

「返事ナシか。さっきの女の方が相手をしてくれただけマシだった。

クソ真面目な『城砦落とし』はやっぱりつまらない女だな。とつとと殺して、その高慢ちきな鼻をへし折ってやるよ。

「ご自慢の重武装が役に立たない事を、あの世で後悔すればいいさ」

言葉の終わりとともにポルメリアは悪寒を感じた。左から何かがくる。

そう悟った時には遅かった。左脇の下に深々と短剣が刺さった事を知る。

苦し紛れの一太刀を左に向けて放った時には、一瞬見えたと思ったクレドネエの姿は闇に消えていた。

咄嗟にポルメリアは壁に背中を預ける。心臓にまで達したと思えるほどの深い傷だ。

血が溢れる。ご自慢の高速治療能力でもなかなか傷口が塞がらない。

彼女は善なる軍神の使徒に与えられた傷を癒す能力を全開する。それでもしなければ激痛と出血で立っている事もままならない。

呼吸が荒くなったが傷を瞬時に癒したポルメリアは再び剣を構える。

大丈夫。心臓の傷も癒えた。大丈夫。私はまだ戦える。

だが、もはや自分には余裕がない事を彼女は悟った。

クレドネエの刃は浮遊盾はおろか、彼女の鎧すらすり抜けて深手を負わせた。

もう一度同じ傷を受けても立っていられるかどうか、彼女自身心許ない。

手加減などしている場合ではない。彼の動きを捉えたならば一撃で倒さなければ、殺されるのは自分の方だ。

油汗を拭いながらポルメリアは覚悟を決めた。

「へえ。今で生きているのか。さすがに頑丈だな。だがお前の盾も鎧も無意味だつて事は、これで解っただろう。

他の人間に比べれば死にくいのが売りだろうが、もう一度心臓を貫かれても生きていられるか、試してやるよ」

流れた血が鎧や衣服にまとわりつく。その不快さを押し殺して彼女は感覚を研ぎ澄ました。全てが一瞬で決まる。一瞬で決める。

彼女が挑発に乗らない事を知ったクレドネエも無駄口を叩く事をやめた。

その彼の呼吸音さえ感じ取ろうとポルメリアは自分の呼吸を整える。

静かだった。黒々とした闇が全ての音を飲み込んでしまったようで、自分の光と意識以外のものがこの世に存在するのだろうかと思ってしまうほどに無音だった。音といえば自分の心臓の鼓動ばかりが感じられる。それだけが生きている証だ。それだけが自分の証明だ。

自分自身と闇だけが存在する世界。

だがそれは錯覚だ。階下で人の気配が増えている。リュイーズの手配した増援が到着したのか、突入の準備を始めているのか。逃れる場所のないクレドネエにも解っている筈だ。増援が来る前に仕掛けるか。乱戦に持ち込んで混乱させるか。それを考えているだろう。

もしも、先ほど見た魔法陣が彼にとつて脱出手段を意味するならば、魔法陣を起動させる条件が整い次第逃げ出すだろう。その時、乱戦であるのは彼にとつてまずい事だ。

混乱に紛れて逃げ出すつもりがないならば、増援が来る前にポルメリアを殺そうとするだろう。

クレドネエは逃げ道のない戦いはしない筈だ。だから、仕掛けてくる。

きつと来る。彼女がそう確信した時、背後で微かな音ともに迫り来る殺意を感じた。

ポルメリアは躊躇わなかった。

もしもそれが囮だったとしても構わず、自分の利き足を軸に身を一回転させ剣でなぎ払うつもりだった。急所を狙って攻撃してくるクレドネエの呼吸を乱す事ができれば、それで良かった。

鎧の隙間に短剣を刺されなければ、大した傷にはならない！

背後の気配は囮ではなかった。なぎ払う瞬間、ポルメリアは迫り来るクレドネエの目を覗き込んだ。

それは凶暴な歓喜だった。命を奪う喜びに満ちた顔だった。これは私の知っている彼ではない！

タイミングは間一髪だった。彼の短剣が彼女の首筋を薄く傷付けた。同時に彼女の太剣は彼の胴体を捉えていた。歪な形に体を砕かれて、暗闇の部屋の中、埃の積もった床に投げ出されたのは彼の方だった。

苦しませずに速やかに止めを刺す。それがかつての戦友にできるたった一つの事だった。駆け寄り、背骨が砕かれ歪に曲がった彼の胸元に狙いをつける。だがその時、クレドネエがかすめた声をあげた。

「よお、『城砦落とし』。俺、やられちゃったのか。ざまあないな。柄にもなく龍とやりやっつてこの有様とは」

ポルメリアはあわやというところで手を止めた。

「クレドネエ。お前、まさか・・・」

「イリネアはやられちゃった。お前一人しかいないところを見ると、皆やられちゃったようだな。

夢を見たよ。俺が龍殺しの英雄になつてな。街中パレードさ。ところが何を間違つてか、俺、何人かの貴族を殺して回つてな。はは、こいつは夢だ。ありえねえって・・・なあ、『城砦落とし』？お前もそう思うだろう・・・って、なんて顔をしているんだよ、お前・・・」

それつきりだった。それつきりクレドネエは何も言わなかった。はつきりとしめない悲しみと虚脱感にポルメリアは襲われた。

最後の瞬間、クレドネエは龍と戦って殺されたと思っていた。

龍殺しの称号を取り、メルクスの都城で歓迎を受け、その後、中原を戦乱の渦に巻き込む暗殺を繰り返してきた事は全て夢だと思いながら死んでいった。

彼の為にはそれでよかったのかも知れない。

でも夢の中の事と思われて殺されていった人々はどうなるのだろうか？

そして暗殺事件の黒幕を知っていたかも知れない彼は死んでしまった。もはや戦乱を止める事はできない。

ポルメリアはただただ立ちすくむしか術がなかった。

その時、背後で場違いに明るい少年の声が聞こえた。それは今となっては遠い昔と思えるほど前に、聞いた覚えのある声だった。

「あれ、死んでる？やっぱりこそ泥上がり暗殺者じゃ、善なる軍神の『戦闘人形』には勝てないか。

まあいいさ。十分時間は稼いでくれた。十分すぎるほどにね」

鞭のようにサーコートの裾を翻してポルメリアは振り返った。魔法陣が描かれていた場所。

そこに見覚えのある赤毛の少年が明るい上機嫌の笑顔で立っているではないか。

半ば透けている姿から、それが幻影だという事はポルメリアにも一目で解った。

「貴様は……『ワーム』……」

睨みつけるポルメリアに余裕の微笑を返す『ワーム』。

「覚えていたかい。しづといお嬢さん。君に関わりあうと話が進まないと思つて色々手を打ったけど、

今回は効果的だったみたいだねー。元仲間を自分の手で殺した感想はどうかな？

いや、君には前科があったな。『師匠殺し』が。もう慣れっこかな？」

「ふっけるな」

かつてはその圧倒的で邪悪な気配に威圧され萎縮しそうになった彼女だが、今は違う。怒りに燃えた藍色の瞳が『ワーム』の威圧感を押し返している。

「……待て。色々……だとかまさか……」

「ああ、ロスペロツソの話かな？そっだよ。彼は僕の配下というか知り合いというか、

まあ手駒の一つだったね。あんなにあっさり殺されるとは思わなかったよ。ただ破壊しか能のない馬鹿だからしかたないか。

あんなのと僕を混同するなんて、がっかりというか、なんというか。まあ、ご苦労様？」

悪戯小僧が自分の悪戯が成功した時に見せる満足げな笑みを『ワーム』は浮かべていた。

しかし、それよりも何よりもポルメリアは混乱していた。

今の言い草から暗殺事件の黒幕が『ワーム』である事は理解できる。しかし『ワーム』が口を滑らせた今の言葉は一体なんだ？

かつて北の大地に破滅をもたらし、トゥルスとイリネアの一族を滅ぼした巨大な赤龍。

幼い日にポルメリアが戦慄した、空を燃やしたものの正体がロスペロツソと信じてイリネアたちは戦った。

自分とロスペロツソを混同している？

「まさか……まさかー」

信じたくはなかった。だが『ワーム』は上機嫌に真実を告げた。

『地獄の先触れ』と言われる者がロスペロツソ如きに務まると思うかい？
地獄の諸君主に互する力を持つ者を、本当に君ら如きで倒せると思っただかい？

しかしまあ、こつちにも君たちの相手をするつもりがまったくなかったんだから、
そう思い込んでもらっていてもまったく不都合はなかったんだけどね。自分から喋っちゃしょうがないね。失敗失敗」

そう言われれば『ワーム』とは長虫、歳経た龍のこと。彼は仇名でも通り名でもなく、本当に自分の正体を名乗っていたのだ。

「それでは・・・それでは・・・」

家族や一族、そして自分の人生を破滅させた仇を、我が身と引き換えに滅ぼしたと信じて、
満足げに死んでいったイリネアやトウルスは一体どうなるのだ。彼らの死は、一体なんだったのだ？

ポルメリアの自問を読み取ったとでもいうように、『ワーム』は楽しそうに言った。

「そういう訳で、君達は道化を演じていたのさ。無駄死にというか犬死にというか、だから言っただろう？ご苦労様ってね」

彼女の周りの空気が変わった。激しい怒りが鎮まっている。しかしぴりぴりした緊張感が消えた訳ではない。

他の者ならばそれだけで畏怖を感じる。だが地獄の諸君主にも互すると豪語する『ワーム』は却って面白そうに彼女を見ていた。

「私は、生れ落ちた時から善なる軍神に捧げられし者。

剣を取り幾多の戦いを駆け抜けてきたが、それは全て善なる軍神の教え、弱き者たちを救うための戦いだった。

悪とはいえ、その命を奪う事に躊躇いや後悔もあった。

だが義務ゆえに剣を取り戦い続けた。名誉を汚す事なく戦い続けた・・・。

そこには私の感情が入り込む余地はなかった。

だが、今は、お前だけは・・・」

昂然と顔を上げポルメリアは愛剣で『ワーム』を指し示した。世に戦乱と混乱を撒き散らし、友の死を嘲弄する『ワーム』に。

「私は、お前が憎い！」

決然とした彼女の言葉を聞いた『ワーム』は思わず吹き出し、無邪気に腹を抱えて笑い出した。

弱者を虐げ、強者を出し抜き、ひたすら己の権利、権力を得る為に闘争するのが地獄の論理だ。

地獄の支配者である諸君主たちに匹敵する力を獲得している彼は、その道の達人ともいべき存在で、
彼にしてみれば他人に憎悪を叩きつけるなど、今更とでもいべきお笑い草なのだろう。

彼こそ、他者の憎悪や恐怖を呼吸するように吸い込んできた者なのだから。

赤毛の少年はけらけらと、一辺の邪気さえ漂わせずにしばらく笑い続け、そして笑い声だけを残して消えた。

残されたのはポルメリアただ一人。暗闇の中で自身が発する淡い光の中、たった一人で立ち尽くす。

怒りと憎悪の昂揚感が消え去った後、彼女は改めて床に転がったクレドネエの骸に目を向けて悟った。

私はまた、ただ一人だけ生き残ってしまったのだと。